

Title	これからの歯科医療でのオーラルメディシン
Author(s)	片倉, 朗
Journal	歯科学報, 112(4): 4i-4i
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/2917">http://hdl.handle.net/10130/2917</a>
Right	



## これからの歯科医療でのオーラルメディシン

片 倉 朗

オーラルメディシンは欧米では早くから確立された歯科の専門分野であり、そのさきがけは1925年にタフツ大学歯学部とその研修コースが設立され、その後病理学や皮膚科等の医科と協働し全身を俯瞰した歯科医療を展開することを目的とした講座を構築している。我が国は超高齢社会となった現在、歯科においてその疾病構造や求められる医療サービスの内容は大きく変化し、その対象となる人が全身的に様々な問題点を有することはしばしばで、一般歯科臨床の場においても医学的に問題点がある患者に対しての治療は特別なものではなくなっている。しかしながら、オーラルメディシンあるいは口腔内科という分野は、国民はもとより歯科界でもその内容と役割はまだ十分に周知されていない。1966年にアメリカに発足した The American Academy of Oral Medicine (AAOM) に遅れること45年、2011年に日本口腔内科学会 (Japanese Society of Oral Medicine) が設立され、「オーラルメディシンは歯科患者の口腔だけに視点を向けず、大局的立場に立ち、全身的背景を考慮した口腔疾患の診断と治療を目的とし、外科的アプローチを主体とせず口腔の医療にあたるもの」と定義された。

1981年に我が国で最初に設立された本学オーラルメディシン講座を引き継ぐ私たちの役割は今現在の歯科の状況を鑑みた時、大きく2つあると考える。オーラルメディシンは正確な診察と検査、診断、治療さらに治癒した時の検証というプロセスを重視する。元来、歯科は外科的なアプローチが主体となっていたことから技能の教育にその主体があった。生活環境の変化と高齢化の進行に伴って、歯科でも内科的アプローチと外科的アプローチの双方が必要となっている。口腔軟組織疾患、口腔の機能低下に伴う疾患、全身的背景をもつ口腔領域の疾患、さらにはその背景因子となる内科疾患の病態を最新の情報をもって体系的に構築し、その方法論を普及させるために臨床と卒前・卒後教育においてそれらを実践することが最も重要な責務である。さらに医科と歯科の連携の重要性が注目されるなか、内科疾患についての知識も当たり前になり歯科医師に求められる時代になっている。歯科医師が頻度の高い高血圧・虚血性心疾患・糖尿病などの内科疾患の病態・治療法・予後についての知識を持って主治医と連携し、その歯科治療上の安全管理は歯科医師自身が判断・計画できるだけの知識を習得する生涯学習の機会を設けてゆくことも重要である。また、AAOMは 'Oral Medicine, We bring Medicine to Dentistry' といっている。そのためには歯科臨床の立場からも必要なテーマの問題提起を医科に向けて発信することも役目となる。講座の診療科がある本学市川総合病院は20科を有し、臨床・教育・研究ともに各科ならびに多くの職種と患者を取り囲むチームとしての医療を展開することをモットーとし、まさに述べてきたことを実践するには絶好の環境である。多くの生活習慣病で口腔機能や口腔内細菌との関連性が科学的にも検証され、歯科医師が健康長寿に果たす役割はさらに幅広いものになっている。口腔内科の学術ならびに臨床の確立の重要性がそこに存在する。

(東京歯科大学オーラルメディシン・口腔外科学講座 教授)